様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２６ 年　 ６ 月 １２ 日現在

機関番号：２１６０１
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2011～2013
課題番号：２３５９０８０４

研究課題名（和文）家族と同居する高齢者の孤立が心身に与える影響と支援方策の検討

研究課題名（英文）The physical and mental effects of isolation on elderly people living with family members and examination of related support measures

研究代表者
中野　匡子（Nakano, Kyoko）

福島県立医科大学・医学部・研究員

研究者番号：５０２９５４０８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　2,700,000円、（間接経費）　810,000円

研究成果の概要（和文）：地域在住高齢者で家族と同居する者の社会的孤立を検証した。要介護認定を受けていず、他者との交流の少ない者を社会的孤立とした質問紙調査の結果、社会的孤立は24.1%存在していた。社会的孤立に関連した要因は同居家族以外からのサポートの少なさ、精神的健康の低下、知的能動性の低さ、生活習慣の不良であった。追跡調査で社会的孤立の発生に影響する要因は、同居家族以外からのサポートの少なさだった。社会的孤立者とその同居家族へのインタビュー調査では、社会的孤立者の虚弱な傾向などが得られた。高齢者支援に関わる者の意見収集からは、社会的孤立に対する新たな支援内容と従来の支援内容の充実などが得られた。

研究成果の概要（英文）：We examined the effects of social isolation in community-dwelling elderly living with their family. We carried out a questionnaire survey of individuals who had not been authorized to receive nursing care but had little interpersonal contact, and therefore are regarded as with the risk of social isolation. We found that 24.1% of the participants were socially isolated. Factors associated with social isolation comprised lack of social support from non-family members, poor mental health, low intellectual activities, and poor health practices. In addition, the lack of social support from non-family members was a contributing factor for the development of social isolation. Interviews with socially isolated individuals and family members revealed a tendency to frailty among the socially isolated individuals. Individuals involved in elderly support recommended new types of support to counter social isolation and the improvement of existing support measures.

研究分野：社会医学

科研費の分科・細目：公衆衛生学・健康科学

キーワード：社会的孤立　地域在住高齢者　家族と同居

１．研究開始当初の背景

地域高齢者における社会的孤立者の健康度の低下、自殺や要介護リスクが問題とされている。日本では要介護認定を受けた高齢者に対しての支援は整っているが、社会的孤立の問題は実態の解明や支援の検討を要する状況にある。

２．研究の目的

本研究では地域在住の高齢者のうち、知見がまだ少ない家族と同居する者に注目して社会的孤立の出現率と心身への影響を検証し、さらに社会的孤立に対する支援策を検討することを目的とした。

３．研究の方法

要介護認定を受けていず、他者との交流の少ない者を社会的孤立（使用尺度：Lubben Social Network Scale-6 にて総得点で 12 点未満の者）として、その実態を把握するために質問紙調査と社会的孤立者とその同居家族へのインタビュー調査を実施した。さらに社会的孤立への支援を検討するため、高齢者支援に関わる者からの意見収集を実施し、社会的孤立の支援策の基礎資料としてまとめた。

４．研究成果

① 平成23年12月に東京都Ａ区の地域在住高齢者 2000 人に郵送にて質問紙調査を実施した。調査の結果、社会的孤立は家族と同居する高齢者で 24.1%存在していることが明らかとなった。社会的孤立に関連した要因は同居家族以外からのサポートの少なさ、精神的健康の低下、知的能動性の低さ、生活習慣の不良であった。

② 平成 24 年 12 月の追跡調査において、社会的孤立の発生に影響する要因は同居家族以外からのサポートの少なさだった。これらから社会的孤立の予防にむけて、友人づくりにつながるような活動の支援が重要であることが示唆された。

社会的孤立と心身の関連については、横断調査、縦断調査で明らかな結果は得られなかった。これは質問紙調査の結果によると、回答者の生活機能が比較的高い傾向にあり、追跡期間が 1 年と短期間であったことなどが一因であると考えられた。また、約 4 割の未回答者の実態が不明なため、社会的孤立の実態の解明に課題が残ったと考えられる。

③ ・最終年度の平成 25 年度における社会的孤立者とその同居家族へのインタビュー調査からは、社会的孤立者が虚弱な傾向であること、人との交流を望む者、望んでいない者が存在していることなどが示された。

【インタビュー調査結果のまとめ】

＜本人の交流に向けた行動＞

1）交流する行動をとる
2）活動に参加する
3）周囲の誘いを受け入れる

＜周囲の本人への働きかけと地域連携＞

1）周囲が声かけなど話しかける
2）日頃の近所付き合いをする
3）近所から気遣う、関わる
4）催事に本人を誘う

＜高齢者事業の充実＞

1）高齢者支援事業の充実

＜民生委員活動の維持＞

1）民生委員の巡回

・最終年度の平成 25 年度において、高齢者支援に携わる役割を担う者に対して、社会的孤立予防に向けた支援について意見収集も実施した。得られた意見の中から、本研究の社会的孤立に該当し、重要であると考えられる支援内容について抽出し、その結果を以下にまとめた。意見収集からは、社会的孤立に対して新たな支援内容と従来の支援内容の充実などが得られた。

＜支援者側＞

1）調査表の未回答や未受診者の状況把握
2）退職や保険証切換え前等、今後の生き方を考える機会となる案内を検討
3）各社会的孤立者の興味関心等の情報を得て、関わりのきっかけを情報収集
4）男性のみの講座や企画を設け、従来の性別を問わないものと並行運営
5）見学や気楽な立寄り型で、申し込みや料金が発生しない企画を継続
6）訪問型の支援について検討（外出ではなく、訪問傾聴ボランティア等）
7）企画やイベント広報の場を拡大（公共施設以外の場所の利用、口コミ等）
8）特技を持ち他者支援が可能で、意欲のある高齢者の活躍の場の拡大
9）日常と有事（自然災害等）に援助可能な複数人物の保有を促し
10）公的企画と地域ボランティア活動内容が共有され、活用できるシステム構築
11）社会的孤立者と小学生という世代間交流について検討

＜本人＞

1）何かに誘われたら、数回に 1 度、わずかな時間でも行動する
2）有事の際に地域で複数の頼れる人物の連絡先や相手との確認をしておく

＜周囲の人々＞
1）家族が時折、軽い企画、施設や講座見学に誘う
2）本人の興味関心を考慮して、周囲が交替して企画やイベントの紹介の継続

④ 3 年間の調査による社会的孤立の支援策案
結果からは、従来の高齢者支援策で実施されていない課題と従来の支援の充実を求めるものがあった。これらを基礎資料として今後に生かすことが課題である。

【新たな検討案】
＜A：公的機関＞
1）退職・保険証の切換え前等の時期、将来生活の啓発案内の検討
2）高齢者支援事業内容の充実と広報活動を拡大
3）施設利用型と共に、訪問支援型の検討
4）高齢者に関する公的、それ以外の活動の把握、有効活用を検討
＜B：組織の連携＞
1）地域高齢者の「かかりつけ医院や病院と保健センターの連携」を図る ⇒地域包括センター（人との交流の少ない者、虚弱者の情報交換）
＜C：公的とそれ以外の連携＞
1）一次予防事業施設とボランティア団体の活動内容の把握と共有、その有効活用

【従来支援の充実】
＜D：公的機関＞
1）調査表の未回答や未受診者等の状況把握をする
2）高齢者支援事業内容の検討と充実させる
3）自立した高齢者の活躍の場、機会を拡大する
4）地域在住で心身が虚弱、社会的孤立者の把握と情報共有、支援の検討をする
＜F：本人＞
1）他者の誘いで興味があるものに時折でも出向く
2）日常と有事における援助者の複数確保
＜E：本人の周囲、地域＞
1）地域住民間の挨拶や近所づきあいを維持する
2）見守り、声の掛け合い、誘い合い意識の啓発と維持する
3）社会的孤立者の興味関心事が何であるのか情報収集する
4）自主サークルやボランティア団体の活動内容の広報と維持をする

⑤ インタビュー調査と支援策の意見収集
は、限定された地域からのまとめであった。しかしながら、3 年間の研究において、社会的孤立の実態と支援策案の基礎的資料を得ることができた。
今後、社会的孤立の地域による差異、性別による検証など、さまざまな視点でさらに検証することが必要であり、社会的孤立の予防、支援策の構築を図ることが望まれる。

５．主な発表論文等
〔雑誌論文〕（計２件）
① Shimada K, Yamazaki S, Nakano K, Ngoma M A, Takahashi R, Yasumura S. Prevalence of Social Isolation in Community-Dwelling Elderly by Differences in Household Composition and Related Factors: From a Social Network Perspective in Urban Japan. Journal of Aging and Health 2014 May 8. [Epub ahead of print]
② 吉田和樹，山崎幸子，高橋龍太郎，安村誠司．地域高齢者における生活機能の関連要因　Breslow の 7 つの健康習慣に焦点をあてて．応用老年学 2013; 7(1): 24-32.

〔学会発表〕（計３件）
① 島田今日子，山崎幸子，中野匡子，吉田和樹，高橋龍太郎，安村誠司．高齢者の社会的孤立の実態　1 年後の追跡調査から．第 72 回日本公衆衛生学会総会抄録集 2013；409.（示説）
② 島田今日子，山崎幸子，中野匡子，吉田和樹，高橋龍太郎，安村誠司．地域在住高齢者の社会的孤立に関連する要因の検討　都心部におけるソーシャルネットワークの視点から．老年社会科学 2012；34(2)：190.（口頭）
③ 吉田和樹，山崎幸子，島田今日子，中野匡子，高橋龍太郎，安村誠司．地域高齢者における健康習慣と生活機能の関連　Breslow の 7 つの健康習慣に焦点をあてて．老年社会科学 2012；34(2)：199.（口頭）

〔図書〕
なし

〔産業財産権〕
なし

〔その他〕
なし

６．研究組織
(1)研究代表者
中野 匡子（NAKANO, Kyoko）
福島県立医科大学・医学部・博士研究員

研究者番号：50295408

(2)研究分担者
安村　誠司（YASUMURA, Seiji）
福島県立医科大学・医学部・教授
研究者番号：50220158

山崎幸子（YAMAZAKI, Sachiko）
文京学院大学・人間学部・准教授
研究者番号：10550840

(3)連携研究者
なし